
ICT と国語教育

三観・中部中 松堂 幸太

1 はじめに

様々な研修で ICT の活用と実践が話題となっている。授業での使用方法や生成 AI について議論が交わされるなか、自分の教室で今年起きたこと、印象的だった出来事を二つ振り返り、ICT の活用について考えたい。

2 ICT の活用

2 学期から、Google スプレッドシートを用いた振り返りのデジタル化に取り組んだ。Google クラウドの機能を使えば、テンプレートを一つ用意するだけで、各生徒に個別のファイルを簡単に配布できると知ったことがきっかけである。ICT に明るい先生方からすれば「今さら？」と思われるかもしれないが、私にとっては目から鱗の発見だった。

さっそくテンプレートを作成し、生徒に配布した。これまで紙で配っていた振り返りシート（生徒が紛失することも多くあったため、私が回収・再配布していた）がデジタル化され、目新しさも手伝ってか、生徒たちは意欲的に書き込みを始めた。中には 300 字近い振り返りを書く生徒もおり、「これはいける」と手応えを感じた。100 人近い生徒の振り返りを一括で配布・回収・添削できる点にも、大いに満足した。

しかし、次第に生徒たちから不満の声が上がり始めた。「先生、タブレットの充電が切れて書けません」「書いていた内容が消えました」「やっぱり紙の方が書きやすい」…。生徒も慣れないなか対応していたが、次第に「紙に戻してほしい」という声が多くなっていった。

ICT の導入は、単にツールとして使えばよいというものではなく、運用の工夫や生徒の実態に即した授業設計が不可欠であることを痛感した。しかし、使わなければ生徒は慣れない。ま

だまだせめぎ合いが続くようである。

もう一つの出来事は生成 AI の活用である。3 年生和歌の授業で情景を視覚的に伝えるため、AI にイメージイラストを生成させたことがあった。

例えば、紀貫之の『袖ひちてむすびし水のこぼれるを〜』という和歌をもとに、Gemini にイラストを依頼したところ、なんとも奇妙な画像が出力された。着物の袖を川に突っ込み、川と袖を凍らせる謎の能力を持った女性が自信満々の表情で座っているという、季節感も情緒も吹き飛んだイラストが完成したのである。「どんなプロンプトにすればうまく画像化できるのか」と悩んでいた。しかし、そのときふと思った。

「このズレたイラスト、授業で使えるのではないかと。実際に授業で提示してみると、生徒たちは「何かがおかしい」「どこに違和感があるのか」「和歌の情景としてふさわしいものは何か」といった視点で活発に意見を交わし、結果的に和歌への理解が深まった。AI の誤読やズレを逆手に取ることで、かえって生徒の主体的な読みを引き出すことができたのである。

ICT や生成 AI の活用は、これからの時代に切っても切れない話題であろう。今年度の二つの出来事から、大切なのは「主語をどこにおくか」と感じる。つまり、誰にとって有益なのかである。スプレッドシートを作成したときの主語は「私自身」であった。タブレットで一元管理できることは私にとって大変便利である。もちろん、その視点も大切だが、和歌の学習においては、「生徒自身」を主語に据え、生成 AI を活用できたように思う。誰のための ICT 活用か。よく考えながら使用することで Gemini たちには、今後も相棒として大いに活躍してもらいたい。